

編集後記

本年2月に交流協会東京本部に着任後8ヶ月が経ち、順番で回ってくる「交流」の編集後記執筆は今回で2回目になります。海外勤務から戻って7年ぶりの東京勤務ということもありますが、今年の夏の暑さは尋常ではなく、本当に心身ともに疲弊し、やっと乗り切ったという感じです。他方、秋になったら急に寒くなり、1年で最も好きな秋の小春日和を堪能する間もなく、すぐに冬が来そうので残念です。

9月11日に日本政府が尖閣諸島の購入を決定してから、中国では連日反日デモが各地で起こり、日本企業が壊されたり、日本人が嫌がらせを受けるようなことが続き、日中関係は緊張しました。実は私の二人の子供が北京に留学しています。この頃は毎晩のように電話で近況を聞いていたのですが、ある日、高校3年生の娘から「お父さん、日本と中国は戦争になるの?」という電話を受け、「そんなに心配しているのか、これはいかん」と10月上旬、急遽北京へ子供たちの様子を見に行きました。私が行った時はもうデモはなくなり、北京の様子は表面上は落ち着いていました。娘も、「日本人の友達とタクシーに乗って日本語を話していると、運転手が、君たちは日本人か韓国人(北京の外国人は韓国人が最も多い)かって聞くから、変な運転手だったら韓国人だって答えているよ。」と笑いながら言うので、それがいいのか悪いのか微妙に感じながらも、娘も怖がっているばかりではなく、結構北京での処世術を自分なりに身につけているんだなあと感心しました。また、大学1年生の息子は、「自分の大学では、先生は教室で中国の立場をがんがん言うけど、学生はみんな冷静で、日本人学生に嫌がらせをするようなこともないので心配ないよ。デモにも大学生は参加してないと思う。だけど、尖閣諸島に関する日本政府の立場を正確に教えてよ。」というのを聞いて、こっちも結構しっかりしているなと感心。これなら別に慌てて来なくてもよかったかなあと思いながらも、やはり電話やメールだけでは得られない安心感を肌で感じる事ができたので行ってよかったと思いました。子供たちも同じ思いだったと思います。通信技術がこれほど発達している現代でも、人と人が「会う」という原始的な行動が、やはり最後の手段なのだと思えました。日本へ帰る前に子供たちと行った北京の日本大使館付近の寿司屋は、いつもと違い日本人客は一人もおらず、中国人客ばかりだったのが印象的でした。

もちろん台湾では過激なデモは発生しませんでした。しかし、9月25日に、40隻もの台湾漁船が尖閣の領海に侵入するという大事件が起き大いに驚かされるとともに、大変残念な思いをしました。

(総務部長 小松 道彦)